

スマートキッズ発達支援研究所便り 「きらっと」30号

2022年7月1日

研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



「こだわり」を力に

研究所員 蒲地 啓子

NHKに「イッピン」という番組があります。この番組は、各地の「イッピン」を製作する人々の職人技と、極限までそれを追求していこうとする人物像が映像で綴られるのですが、彼らの「こだわり」は相当のものです。細部にまで意匠を凝らした「逸品」を製作するには、並々ならぬ集中力と、表現を突き詰める根気強さ、微妙な変化をとらえる繊細さと正確さが必要になります。超絶職人技にはこれらの要素が不可欠のようです。

人は誰しもそれぞれ独自の「こだわり」があります。「逸品」を作る人たちのそれは他の人の共感や感動を呼ぶものでありますが、一方他人からはその「こだわり」が理解されない人たちもいます。「こだわり」は極めて個人的で独特な、ある種の「心地よさ」を伴う「納得の世界」であるからかもしれません。

発達障害の子どもには、「こだわり」が強く表れる場合があります。彼らは「安定している」ことが大好きなので、ある特定の場所や物、やり方等に強い執着を示したりします。「いつもと同じ」ことは、自分の落ち着きのために大事なことなのです。傍からは全く同じように見えても、驚くべき注意力で微妙な違いに気付き、いつもと同じように修正したり、あるいは分類したりします。いったん決めたルールは守られることが大事なので、人の間違いを厳しく指摘するのもこのせいです。几帳面で正確で粘り強いからこそその行動であると理解することができそうです。それらの行動は本人なりに意味があるのですが、言語化が難しいため周囲には理解されにくいことも多いです。少しでも開いている戸を見つけると、それがどこであっても「パン」と音を立てて閉めないと気が済まない子がいました。何かぶつぶつ言いながらやっていたのですが、かなり後になってそれが「扉が閉まります、ご注意ください」だったことに周囲が気づきました。電車やバスに見立てての行動だったのです。

彼らにとっての「こだわり」は、心の安定を保つために必要なものでもあると言えます。彼らは見たことがないことや経験したことのないこと、この先何が起こるのかを想像すること、イメージすることが得意ではありません。定型発達の人とは、突然に予期しないことが起こると、過去の似たような場面を想起してその場を乗り越えようとしていますが、彼らにとってはそれが難しいので、臨機応変に対応することが苦手なのです。入学式にパニックになってしまう、園や学校での宿泊行事を行きたがらない等はこのせいかもしれません。見通しをもつことが大事なので、予め写真やビデオ等を使って説明するだけでも不安が和らぎます。勝ち負け、特に負けを受け入れることができないのは、勝負は勝ち負けだけではないということや、負けた自分が想像できないことによると言われています。彼らにとって世界は不安と隣り合わせなのでしょう。

そのような中で生活していれば、自分の安定した世界が壊される、つまり「こだわり」を止められるのは辛いことです。その子が自分の気持ちを安定させる手段が奪われることを意味する場合もあります。

発達障害の「こだわり」は、成長とともに徐々に目立たないものに変化していくことも多いので、本人や周囲の人の生活の質を落とさない程度の「こだわり」であれば、そのまま認めてやるのも方法です。その場でくるくる回転する、つま先立ちで歩く、手をひらひらさせる等の「常同行動」と言われるものも、子どもなりの不安への対処方法の場合であったり、自分がしてほしいことがある場合のサインであったりします。これを「やめなさい」「ダメっ」と頭から否定されれば、欲求が満たされなくなるので、それらの行動がより激しさを増したり怒りを爆発させたりすることもあります。「こだわり」行動の意味を周囲の人が受けとめ理解することが、本人の安心と成長を導き出すことになるのかもしれませんが。

しかし、「こだわり」が許容範囲を超え、不適切でやめさせなければならない場合もあります。その場合は、まずその子の不安な気持ちを受け止めながら、気持ちをそらす代替の具体的な方法を示し、本人に選ばせるとい方がよいでしょう。「心配だったんだね」「負けて悔しかったんだね」と、本人の気持ちを言葉に表して返しながら落ち着かせる時間をとりましょう。その後、具体的な方法を提案してみてください。生まれた時から使っているぼろぼろになった毛布を手放させない子には、その切れ端で作った小さなマスコットが代替物になるかもしれません。触覚や嗅覚がこだわりであることも多いのです。大事なことは、無理強いではなく、本人に確認したり、様子を見ながらやってみたりすることです。不安への対処法は、人それぞれみな違います。本人が安心する代替の「こだわり」は何か、一緒にさがしてみてください。

今からもう40年以上前になりますが、A市の小さなワイナリーを訪ねたことがありました。山間の細い道をたどっていくと、急に明るく森が拓け、びっくりするような急な山の斜面にブドウ畑が広がっていました。その当時まだ小さかったワイナリーでは、案内の方が「ワインの貯蔵庫で寝かせたワインの瓶を、定期的に四分の一回転ずつ、正確に回すことで上質なワインが育つ」という、実に気の遠くなるそのワイナリーの「こだわり」を話してくださいました。また、山の斜面で草を刈りそれを地中にすき込む作業を繰り返すことで、無農薬の有機農法のワインへの「こだわり」も伺いました。作業を確実に繰り返す几帳面さ、変化を見逃さない繊細な観察眼、労を厭わない粘り強さという「こだわり」こそが、ワインづくりに必要な資質なのだそうです。障害のある子どもたちの保護者が集まって、その子どもたちがもつ「こだわり」という資質を生かして就労の場を創り出そうと始めたというワイナリーの誕生の話聞きながら、ワインのおいしさと共に感動をしたのを覚えています。そのワイナリーで生産されたワインは、今ではサミットでの晩さん会や国際線のファーストクラスで提供されるような「逸品」となり、多くの人の知る所となりました。「こだわり」を「よさ」としてとらえたとき、新しい可能性が広がるのを教えてもらいました。



<プロフィール> 蒲地 啓子（かまち けいこ） 帝京大学大学院教職研究科客員准教授

横浜市立小学校教員を経て、横浜市教育委員会指導主事、横浜市立小学校長、横浜市教育委員会課長等として、主に不登校児童生徒や発達障害のある子どもたちを支援する横浜市の専門教員である児童支援専任教諭（校内で特別支援教育コーディネーターと児童指導担当を主に担う）の育成にかかわってきました。また、横浜市教育相談センターで不登校問題に、またスクールソーシャルワーカー運用事業にかかわり、様々な角度から子どもたちを支援する仕事に従事してきました。

公認心理師、学校心理士